

## 会議記録

名 称	南丹市教育の在り方懇話会〔第1回〕	
開催年月日・開催場所	平成23年6月2日(木) 午前10時00分～午前11時50分 南丹市役所 2号棟 301会議室	
出席者名	委 員	(出席委員) 山口 満、原 清治、高木 茂、松本 明美、堀川 勝久
	事務局及び 庁内PT委員	(事務局) 森教育長、大野教育次長、前田教育総務課長、西田学校教育課長、 市原社会教育課長、坂瀬総括指導主事、松村社会教育主事、平井社会教育課長補佐、寺田教育総務課長補佐 (庁内PT委員等) 学校教育課(山田研究主事、小南指導主事、下田指導主事、中村指導員、森指導員)
傍聴人	1名	
配布資料	資料1 「南丹市総合振興計画(概要版)」 資料2 「平成23年度南丹市教育の指針」 資料3 「京都府教育振興プラン(概要版)」 資料4 プレゼン資料「南丹市教育ビジョンの策定に向けて」 (参考資料) ・提言依頼書(写) ・懇話会委員名簿	
議事の概要	1 開会行事(委員紹介、佐々木市長挨拶(別記)、事務局紹介) 2 座長選出(山口 満 委員を選出) 3 議題 (1) 挨拶並びに提言依頼事項について(教育長(別記)) (2) 南丹市教育ビジョンの策定に向けて(事務局プレゼン) (3) 南丹市のこれからの教育について ①南丹市の教育に求められるもの ②南丹市の学校教育に求められるもの  4 その他 ・事務局からの報告事項 第2回懇話会の開催日時の確認 5 閉会挨拶	
会議の経過	別紙のとおり	

## ■市長あいさつ■

本日、第1回目の懇話会開催にあたり、それぞれご多用の中、ご出席賜りましたことに心より感謝申し上げます。

本市は平成18年に、旧4町が合併いたしまして誕生した京都府で14番目の市でございます。人口は約36000人、総面積は616.31平方キロメートルという広大な市域ですが、その内、森林面積が88%を占めております。少子高齢化が進み、一方で人口減少が進んでいる。

この間、市民との協働による「森・里・街がきらめくふるさと南丹市」をめざし、本年度で市制5年が経過した。本市では、時代の変化に対応し、魅力と活力に溢れたまちづくりに取り組むための指針として、平成20年3月に『南丹市総合振興計画』を策定している。この振興計画は、まちづくりに向けた基本構想と、これを達成するための施策の方針や基本方向を体系的に示した基本計画、施策方針を実施していくために必要な具体的事業を示した実施計画から構成しており、この計画に込められた基本理念は〈市民の感性あふれる視点が活き、高齢者や障がいのある人の願いが尊重され、子どもたちの夢が豊かに育まれるまちづくり〉である。

〈南丹市教育の在り方懇話会〉の委員としてお世話になります諸先生方・委員の皆様から、本市教育の長期ビジョンに関するご提言をいただくことは、大変意義深いものがあるものと感じている。是非、南丹市の将来を、そしてこれからの社会を担う子どもたちの学びと育ちの現状から、また、自己実現をめざす生涯学習の観点から、本市教育の将来像や期待される姿について、忌憚のないご提言を賜りたい。

また、本懇話会の議論を踏まえながら「学校教育環境」や「中学校給食」という、本市教育行政の喫緊の課題に関する論議にも、別途、検討委員会の中で参画いただくと伺っております。私たちも、教育委員会と市長部局がしっかりと連携しながら構築をしていかなければならないと考えている。本市教育行政の更なる充実にお力添えをいただきますことをお願いしたい。

## ■教育長あいさつ並びに提言依頼説明■

ご多用の中、懇話会第1回目の会議にご出席賜り、お礼を申し上げます。

3月11日の東日本大震災は、多くのものを奪った。他方、被災地から学ぶべきこともたくさんある。とりわけ、地域社会における学校の役割、教育の役割は改めてどれだけ大きなものであるかということをお私たちに投げかけたのではないかと考えているところである。世界の人々が驚嘆する日本の教育の水準の高さ、日本社会のモラルの高さを、世界中に発信することになったのではないかと思う。

合併後6年目を迎えた本市の教育は、単年度毎の重点目標・重点施策を定めながら単年度主義で進めてきた。学校教育・社会教育の両面において、横軸と縦軸を重視した教育を進めており、横軸は各学校が卓越性をめざしたそれぞれの特色ある学校づくりを進めることで学校の果たす役割をより大きなものにする取組。併せて、家庭や地域社会と繋がり合って、社会教育の分野と学校教育の分野が手を携えて前へ進めていくという水平面での横軸の取組

と、就学前から義務教育へとつなぎ、義務教育9年間と就学前をしっかりと見通し、その内容をひとつの柱にしていく縦軸の取組を通して、教育の質的な充実を図ろうとしてきた6年間であった。

少子高齢化の中で、これからの子どもたちの存在が、ますます大きなものになっていくと考えるとき、教育委員会においては従来のような単年度主義ではなく、長期的な視点をもった長期ビジョンを策定した上で、単年度の現状と課題を見つめて教育行政を推進するというスタンスが求められる時期に来たと考える。

長期教育ビジョンの策定に向けて、本懇話会において、豊富な経過経験と識見ある委員の皆様から、南丹市のこれからの教育の在り方を中心にご指導を賜り、提言をいただきたい。

(以下、提言依頼事項の内容を、別紙(「提言依頼」)朗読により説明)

#### ■事務局説明

南丹市教育ビジョンの策定に向けて

#### ■意見交換・協議 [○：委員発言 →：事務局発言]

=座長から論議の進め方について提案後、意見交換に入る=

### =議題1= 南丹市の教育の在り方について

#### 〔ふるさとを愛する・ふるさとを知る〕

- 南丹市の教育について考えるならば、ふるさとを愛する・ふるさとを知ることからそれぞれの在り様を考えるべきではないか。
- 旧町の特徴を一体的に捉えて、各旧町にある文化財を、共通の財産として共有する仕組みや機会を作っていくことが大事であり、これからの教育の在り様を考えていく上での大切な観点である。
- 子どもたちに身につけさせたい「ふるさとを愛する」という感性は、ふるさとに対する大人の感じ方が影響していくものであると考える。
- ふるさとを愛するという観点からの、最近のデータとして、「帰郷」意識を形成する背景にあるのは故郷への愛着ではなく、学校教育へのコミットメントであるというデータがある。つまり、小・中学校での体験がポジティブであれば、帰郷したくなるということである。地域の人材を育てるということは、小・中学校での教育経験(体験)にかかっている。南丹市の教育がポジティブな経験(良好な体験)をさせているかどうか。このあたりを議論する必要があると考える。

#### 〔地域づくり〕〔文化づくり〕

- 本市は社会教育施設が充実している。各旧町の特質(個性)があり、統一的な動きをするのが困難な面もあるが、本市の文化活動を展開するにあたっては、互いの町の特徴を生

かしながら統一的に進めている。

本市の古墳等を代表とする多くの文化財から考察するに、本市は京都中部における中心的存在であったと言える。とりわけ、垣内古墳は大和政権に関係があるものである。このような特色のある地域の個性を誇りとして考えていってもいいのではないかと考える。

- 地域個性を大事にしなが、全体的な文化活動を進めていくかが今日的な課題となっている。併せて、生涯学習における高等教育機関の活用は重要なことである。
- 文化活動の進みは、南丹市民の意識づくり・地域づくりにも関係した課題であると感じる。また、南丹市に多数存在する高等教育機関と言った知的財産を活用することは重要である。
- 地域婦人会の会員数減少等、以前に比べ、農村ほど地域コミュニティーが脆くなっていると感じる。

### 【教育ビジョンの策定に向けて】

- 「南丹市の教育指針」に記載されている〈南丹市の教育がめざすもの（案）〉について、人間の育成をめざすのか、あるいは、人間の育成を通じて地域社会の育成に寄与するのかという基本的な観点を含めて議論が必要である。また、南丹市の教育ビジョンの策定にあたっては、市民に納得のいくわかりやすいものを出していくことが大切である。
  - 将来に向けて「心豊かでともに生きようとする人間の育成をめざす」というフレーズは、地域活動をする上での目標と合致しており、このような人間の育成をめざすとする表現が適当と考える。
  - ビジョンをレベルアップしていくためのキーワードが各委員から出されている。「文化」「市民意識（共に生きようとする共通意識）」「地域意識をつなぐということ」という3点に集約できる。併せて、南丹市の教育の高さについても意見が出された。これをキャッチフレーズとすると「教育の町 南丹市」と言える。
- ◎ 「南丹市の教育にもとめられるもの」として、下記がその理念並びに目指す方向性として適当である旨を確認した。

**市民一人一人が、生涯にわたって学び続けることができる温もりのある地域社会の形成をめざし、自然と文化の薫りが高いふるさと南丹市の未来を考え、主体的に行動できる心豊かでともに生きようとする人間の育成をめざす。**

## ＝議題2＝ 南丹市の学校教育の在り方について

### 【学校教育の現状と捉え方】

- 南丹市の教育の現状を知るにあたり、「学力面の現状と特徴と、そこに見える課題」「学校現場の中に見える特徴」を示していただきたい。

→ 本日提示の資料「平成 23 年度南丹市教育の指針」の中に、本市児童生徒の学力現状と生徒指導に係る内容の一端を盛り込んでおり、学力の現状については、府平均・全国平均と同様か、やや上回る状況にあり、これは、各校の特色ある学校づくりと、(義務教育) 9 年間で就学前を含めた連携した取組による成果ではないかと考えている。生徒指導の現状は、問題行動事象という点においては、府・全国に比し、極めて少ない状況にある。各校のきめ細かな取組によるものとする。

人口減少・少子化という状況の中、各校からの課題という側面からの報告では、大人しく素直であり友達思いであるけれども、教師に対する依存心が強く、主体的に判断したり自分の考えで行動したり、仲間と共に新たなことに取組んでいくといった力が弱くなってきており、たくましさに欠ける側面が大きいのではないかと報告が校長会等から寄せられている。

- 南丹市全体の現状に併せ、個別の学校の現状と個々の子どもたちを見る視点が必要。
- 今、教育現場で「(保) 幼小連携」事業に取組み、現在は、もうすぐ 1 年生生活動の取組をし、小学校との円滑な接続に向けた取組を進めてきている。

また、いわゆる中 1 ギャップをはじめとした小中の段差という課題に対しては、中学校ブロック毎に、授業改善に係る取組を中心に小学校と中学校の教員が交えての学習指導面に関する交流研究等、接続を円滑に行うことにより、教員の資質向上も含めた研究実践を行ってきている。

また、本市には大規模な学校と小規模な学校があり、小規模校の校長との話の中には、きめ細かな指導が可能である反面、たくましさに欠けるという課題面が報告されており、切磋琢磨する場を検討しなければならないと考える。

### **【たくましく生きる力】【つながる】**

- 南丹市の子どもたちに関する事務局説明等から共通していたのは、素直で大人しいけれど、「依存心が強かったり、たくましさに欠けたり」というのが、この地域の子どもたちの課題であるということであった。

(府の『教育振興プラン (H22)』の観点から) たくましさの欠ける子どもが多い理由として考えられるのは、この教育振興プランの中にある「展望する力・挑戦する力・つながる力」の 3 つの力がスパイラルになっていることが必要であるが、この力の内、展望する力が持ちづらい構造になっている可能性がある。

- 小学校と中学校の学力実態は全国や府の平均レベルという状況である。そこで、次回の懇話会に向けては、高等学校への進学実態・高校から高等教育への進路実態とその内訳と配分に関するデータも必要だと思う。ひとつの例として、ある県の学力実態は全国上位にあるが、高等学校や大学への進学率は下位となっている。つまり、このような実態と同じであれば、将来への見通しが立たないということになる。
- 事務局説明や各委員からの意見の中に、市内にある高等教育機関との連携がなされていると聞くが、そのことで果たして将来を見通す力が付くだろうか。あるいは、それだけでいいかどうかは考えていく必要がある。

- 「つながる力」が欠けているのではないか。小規模校が多い南丹市において、小規模の小学校の子どもたちが中学校へ進学してきたときに、その段階でマイノリティーになってしまえば、つながろうとする力は最初から発動しない構造になってしまう。最初からそういう構造が地域の中に特性としてある。そのことを超えて、つながる力を付けようとするれば、南丹市でこれまでからなされてきた幼小中連携といった「縦」のつながりに加え、小学校段階という早い段階から「横」のつながり（同学年のつながり）をどう付けていくかが大切となる。
- 「挑戦する力」が子どもたちに出て来ないとするならば、文化等の地域資源が、学校教育の中でうまく活用されていないのではないか。自分がどんな地域に生まれ育ったのかということが、子どもたちの考えのベースになっていない。婦人会への参加が少なくなり瓦解していくという背景とも関係してくる。
- 今後の議論を深めていく中での大切な論点である。「たくましく生きる力」の育成を阻むものが地域社会の中にあるとするならばそれは一体何であるのか。地域の構造、少子化によって子どもの集団が小規模となってきていることと学びや育ちとの関係について分析していく必要がある。昨年、本市の美山中学校のコミュニティスクール推進事業（国指定事業）に参加したが、地域の学校に対する期待は大きいと感じた。地域の力を学校へ、学校の活動を地域の活性化にとといったことから見られる、地域と学校との新たな関係づくりという観点からの検討も必要である。
- 「つながり」や「つながる」という言葉が多く出てきているが、この「つながり」をキーワードとするにあたっては、南丹市だから地域間のつながりが強いとか、子ども同士のつながりが強い、親子のきずなは強いといった固定観念を外してみる必要があるのではないかと考える。
- 人間同士の距離が近ければ「つながり」が強いのかということ。「包み込まれている感覚」があるかどうかがつながり力に関係すると考える。家庭の中に居場所があって親に愛されているという感覚があると親子のつながりがあるということ。これが、学校の中や地域の中にあるかどうか。次回からの懇話会では、この点に関して考えていくことが必要ではないかと考える。
- つなげるためには「つなげる人」を育てることが必要であるが、この側面が現在では欠けているのではないかと思う。
- 学校教育では横の連携（つながり）も必要と考え、小規模校同士の交流学習等を進めてきている。
- ◎ 「南丹市の学校教育に求められるもの」として、下記がその理念並びにその方向性として適当である旨を確認した。

**幼児・児童生徒一人一人に、「ふるさと南丹市」を愛する心を育み、生涯にわたって学び続けることができる基礎基本の習得を図りながら、未来に向かってたくましく生きる力を育成する。**

3南教総第248号  
平成23年6月2日

南丹市教育の在り方懇話会  
座長 山口 満 様

南丹市教育委員会  
教育長 森 榮一

## 提言依頼

下記に掲げる事項について、別紙理由を添えて提言を依頼いたします。

### 記

南丹市におけるこれからの教育の在り方について

〔理由〕

平成18年1月の南丹市合併以来、南丹市教育委員会は、旧4町の取組の継続と統一的な市教育の推進に努めてきました。

この間、平成18年度に改正された教育基本法では、従来からその理念として掲げられてきた人格の完成や個人の尊厳などの普遍的な理念を大切にしつつ、生涯学習の理念や家庭における教育、さらには、社会全体の連携等、新しい時代に向けた教育理念が示されました。また、平成20年7月には、これらの理念に基づく教育振興に係る基本方針や講ずべき2施策等を定めた教育基本計画が国において策定されました。

京都府においても、教育基本法第17条第2項で努力義務が課せられた地方公共団体の教育振興基本計画としての「京都府教育振興プラン」が、平成23年1月に策定されました。

本市教育委員会におきましては、平成20年3月に策定された『南丹市総合振興計画』を考え方の軸としながら、年度毎に教育に係る重点施策と重点内容を定めながら教育の充実と各種施策の推進に努めておりますが、長期的な視点に立った教育ビジョンについては未だ策定できていない現状にあります。

わが国が人口減少期に入ったと言われていますが、少子高齢化が急速に進行する本市の将来を考える時、本市の特性を踏まえ長期的な視点を備えた教育ビジョンの策定が、何よりも今必要であると考えております。

これらの状況を踏まえていただき、市の総合振興計画の具現化に資する南丹市の教育ビジョンの策定に向け、南丹市におけるこれからの教育の在り方について提言をいただきたく、平成23年12月末日を目途に、ここに検討をお願いいたします。